

# 言語変化としての膠着

児玉望

熊本大学

キーワード：膠着 テルグ語 ドラヴィダ語 比較形態論

## 0. はじめに

「日本語系統論の現在」という名の研究会において、ドラヴィダ語比較言語学を専門とする立場から述べられそうなことはあまり多くはない。そこで、まずはじめに、系統論と言語史学に関する管見をまとめた上で、ドラヴィダ比較言語学が日本語系統論あるいは日本語史学に寄与できる可能性を検討する。

「系統論」は大別すれば二つの観点から論じられる。ひとつの立場は、複数の言語（群）が同一の祖語から変化したものであるという系統仮説を出発点として、これらの言語がどのような変化を経て今の異なる形になったかを再構する、という言語史解明の手段としての系統論である。伝統的な比較言語学は、この立場に立つものである。他方、言語系統の解明自体を目的とする立場もありうる。本研究会で板橋氏が援用した「多元比較法」も、このような系統の論証そのものにかかわる方法論である。この立場は、言語分類学的観点と呼んでよいであろう。

言語分類学的研究においては、ドラヴィダ語に関しても、Menges (1964, 1977) に代表されるような、「ユーラシア（ノストラティック）語族」仮説と総称される多元的な比較研究の対象とする研究がある。興味深い点は、このような多元比較は、ユーラシア大陸の西部または北部の諸言語についてのみ行なわれ、大陸東南部や他の大陸の諸言語とは滅多に結び付けられない、という点である。その点では、ドラヴィダ比較言語学の基礎をなす『ドラヴィダ語比較文法』（Caldwell 1856 1913<sup>3</sup>）で検討され、かつ可能性を否定されていないオーストラリア原住民語・中国語・日本語を含む系統関係仮説よりは穏健であるといつてよいかもしれない。いずれにしても、Caldwell が主として類型論的な特徴に基づいて述べている「ドラヴィダ語はインド・ヨーロッパ語よりはむしろスキタイ語（ウラル語・チュルク語）により近い」とする立場は、今なお踏襲されているわけである。

ただし、このような系統分類は、ドラヴィダ語（あるいはタミル語）と日本語（大野 1981）、ドラヴィダ語とエラム語（McAlpin 1974）といった二元的な系統関係の立証には原理的に適用できない。従って、このような二元的な系統関係説は、比較言語学の伝統的な方法を援用して提唱され、その枠内で検証されてきたといつてよい。このことの利点は、多元比較の場合と異なり、ドラヴィダ系言語の言語史しか知らない研究者であっても、容易に仮説を検証することができる、という点である。どのような系統仮説上の主張であれ、その仮説がドラヴィダ語史の説明としてはどのような主張をしていることになるか、というように読み直して吟味ができるからである。原理的には、未知の言語が発見され、その言語がドラヴィダ系言語の系統樹

の中でどのように位置付けられるかを検討する場合と、比較言語学の方法にはなんら変わりがないのである。

言語分類学的立場からドラヴィダ語と日本語が同じ系統分類に含まれるかどうかの問題に小論において言及することは、筆者の力量の点でも関心の点でもまったく問題外である。では、比較言語学的な観点から述べられるのは、日本言語学会主催のシンポジウム「日本語の系統：回顧と展望」(2000年11月26日 名古屋学院大学)での大野晋氏の報告に対するコメントとして筆者がすでに述べたように、日本語とドラヴィダ語の間の系統仮説は、現在までのところドラヴィダ語史の解明になんら寄与するところがなく、従ってこの仮説を採用すべき理由はない、ということだけであろうか。

言うまでもないことであるが、ドラヴィダ語比較言語学は、単に、比較言語学的方法を用いてドラヴィダ語史を解明することだけを目標とする個別言語学ではないはずである。言語学のどの分野においても、個別言語の研究は、人間の言語が普遍的にもつ性質の解明、というより大きな目標に資することを目指しており、逆にまた、人間が言語の変化には普遍的な性質がある、という前提を受け入れるからこそ異なる個別言語の言語事実の解明に普遍的な方法が適用されるのである。このことは、言語学史を見れば自ずと明らかである。そもそもウィリアム・ジョーンズのベンガル・アジア協会での演説が、それまでにもあった系統説にとどまらず、言語学という新しい学問を生み出したのは、ラテン語やギリシャ語のような古典語も含め、すべての言語が変化の過程にある、という新しい言語観を提示し、広めることができたからであろう。当初は印欧語で観察された音対応は、19世紀後半には比較言語学での系統仮説の条件として、すべての言語変化の原則として受け入れられている。逆に、Greenberg流の多元比較法が、音対応の措定を必要としない、ということは、暗黙のうちに、音対応は、言語の系統分化の進行に伴い、痕跡を残さないほど崩れる、という主張を行なっている、というようにも理解されるのである。このような、言語変化の普遍的な原則に関する言明は、どんな比較言語学的研究からも読み取ることができる。たとえば、日本語諸方言のアクセント比較研究は、単に日本語においてアクセントが対応する、ということにとどまらず、アクセントのような超分節の特徴も分節音と同様に規則的に変化することや、アクセントが変化する場合にはどのようなパターンがあるか、といった、日本語以外の言語にも想定することが可能な言語変化の報告として読むことができるはずなのである。

では、ドラヴィダ語比較言語学は、比較言語学全般に対し、また特に、日本語比較言語学に対してどのような知見を与えるだろうか。この点で、印欧語比較言語学の該博な知識を駆使しての松本克己氏の研究会での御発表は非常に刺戟的であった。分化後の歴史が長く、地域的にも広く分布してさまざまな変化を遂げた印欧語の比較により、言語の中の変化しやすい部分と変化しにくい部分を割り出し、変化しにくいと考えられる類型的特徴がどのような地理的分布を示すか、という観点で日本語の位置付けを解く、という斬新な試みである。ドラヴィダ語は、印欧語には及ばないものの、西暦紀元前後にすでに南部支派内部のレベルでの分化が開始されていたことが文献資料から裏付けられており、祖語からの系統分化の時間が長いという点では、系統関係が立証された世界の語族の中でも有数であるといってよい。従って、言語の通時的変

化に際し変化しにくい特徴の選定に際しては、松本氏の印欧語から導かれた仮説を補強する役割が期待できる。また、印欧語において観察できない類型の特徴の変化については、かけがえのない情報を提供しているとみることができる。たとえば、語幹に複数個の接尾辞が連鎖的に付加されうる、といういわゆる膠着的な形態の特徴は、すべてのドラヴィダ語に共通して維持されており、ドラヴィダ祖語にまで遡りうる変化しにくかった特徴であると考えられる。このような接尾辞の連鎖が言語変化でどのような変化を被るか、といった問題や、新たな「膠着」がどのように発生するかに関して、ドラヴィダ語比較言語学はまとまった資料を提供している点で貴重だといえるだろう。この膠着的な形態の特徴は、よく知られるように日本語にも共通するものである。従って、日本語のもつ形態構成の成り立ちを比較言語学的に再構する上でも、あるいは、多元比較による言語分類学的分析を日本語を含む言語群に適用するに際して、比較の対象となるような変化しにくい形態を選定する上でも、参考にできるはずである。

このような観点から、小論では、ドラヴィダ語比較言語学がドラヴィダ系言語の文法変化について何を明らかにしているかに特に注目し、日本語に似ていると考えられている形態論的特徴とその通時的変化についてまとめてみたい。ドラヴィダ語と日本語が、文法的に共通の類型の特徴を共有することはよく知られている事実である。このことを直ちに言語の二元的な系統関係の有無に結びつけることは無論、比較言語学の原則では許されないことである。しかし、類型的な特徴を共有する二言語が、その類型の特徴の変化の点で、類似した変化を経る、という仮説は、検討に値するようと思われる。もしこの仮説が正しいとすれば、日本語系統論に今後必要なことは、日本語以外のさまざまな言語の比較言語学的な言語史分析の結果を吟味し、日本語に見られる諸特徴のうち、特に変化しにくいと考えられるものを抽出する作業が必要、ということになる。

## 1. 膠着語としてのドラヴィダ語

ドラヴィダ語は、接尾辞の連鎖によって特徴付けられる語構成を持っており、このことと、文相当句の句構造語順が原則として動詞を末尾にもつこととを合わせて、典型的に、日本語・朝鮮語やウラル語の多く、また、いわゆるアルタイ語といった他のユーラシアの言語と共通の言語類型に、古くからあてはめられてきた。しかし、古典言語類型論でいう「膠着語」としては必ずしも典型的な言語とはいえない。この事情は、Schleicher が言語類型論に進化論を流用したのとほぼ同時代に、ドラヴィダ比較言語学の基礎を築いた Caldwell が、agglutinative languages としてのドラヴィダ語を論じているくだりにも見ることができる。Caldwell(1913) は、ドラヴィダ語を含むユーラシアの諸言語を「スキタイ語族」Scythian と称したのであるが、接辞の数には言及しない彼の分類では、インド・ヨーロッパ語自体も膠着語に含まれることになり、両者の違いは本質的なものではなく単なる程度の差である、とする。

(3.) The agglutinative languages, in which grammatical relations are expressed by affixes or suffixes added to the root or compounded with it. In the latter class, I include both the Indo European and the Scythian groups of tongues. They differ, indeed, greatly

from one another in details, and that not only in their vocabularies but also in their grammatical forms; yet I include both in one class, because they appear to agree, or to have agreed, in the principle of expressing grammatical relations by means of the agglutination of auxiliary words. The difference between them is rather in degree than in essence. [Caldwell (1913 : 191ff)]

さらに、いわゆる「屈折語」(Caldwell の Semitic) を特徴づけるはずの、語根の母音交替について、印欧語ではありふれているし、ドラヴィダ語においても見出されることを述べる。

—— and changes in the internal vowels of roots, which are specially characteristic of the Semitic languages, are not unknown in the agglutinative class, especially in the Indo-European family. Such internal changes may occasionally be observed even in the Dravidian languages.

Schleicher の「膠着語」の定義は、「接辞法を用いる (=孤立語でない) 言語」の中から印欧語だけを抜き出した残りともいうような、甚だ粗雑でご都合主義的なものであるが、そのような意図を持たなかった Caldwell は、印欧語とドラヴィダ語の間の違いを、接辞の融合の度合いの違い、というように見たのである。しかしながら、ドラヴィダ語においても語根と接辞の融合は進行しており、以下のテルグ語の活用形に見るように、接辞と機能の一对一对応は崩れ、接辞の境界を一意的に定めることも困難な場合がままある。

	単数主格	単数与格	複数主格	複数与格
手	ceyyi	cētiki	cētulu	cētulaku
家	illu	iṅṭiki	iḷḷu	iḷḷaku
山	koṅḍa	koṅḍaku	koṅḍalu	koṅḍalaku

この中で「山」を意味する語形がもっとも「膠着的」な語構成をもっており、複数接辞と与格接辞がこの順で膠着していることが見て取れるが、この場合においてすら、複数与格の語尾 -laku の母音 a を、数の表示に関わるとするか、格表示に関わるとするかは一意的に決定できない。しかし、この複数語尾の母音の交替は、語幹の交替が見られる語形においてもすべて共通である。さらに与格接辞は母音、複数接辞は子音がそれぞれ異なる異形態が観察されるが、この異形態はほぼ音韻的に条件付けられていて予測可能である。Caldwell が、properly speaking, only one declension (and one conjugation) と言っているのは、このような特徴を指すものと思われる。

与格接辞 (ki/ku) は単複に拘わらず同形である。この接辞が付加される部分を仮に与格語幹とする。実は、この与格語幹は対格接辞 (ni/nu) の付加する語幹と同形で、また、接辞が付加されないものは、名詞を修飾したり、後置詞の支配を受ける語形としても機能するため、斜格

語幹と呼ばれる。ただし、指示対象の人称（1人称単・複、2人称単数）を示す接辞が付加されるときの主格人称語幹もこの形であるから、むしろ「被覆語幹」というほうが適切であろう。本稿では、あえてこの名称を用いる。上述の、複数与格語尾の a は、名詞複数接辞に後続する場合の（唯一の）被覆語幹形成接辞ということになる。しかし、複数接辞を介さない単数の被覆語幹の形成には、専ら語彙的に条件付けられたさまざまな接辞が関与する。

- ti-      ceyyi/cēti- 「手」
- ti-      nīru/nīṭi- 「水」 tābēlu/tābēṭi- 「亀」 cf. anni/anniṭi- 「それだけ全部」 ivi/vīṭi- 「これら」
- ṇṭi-      pallu/panṭi- 「歯」 kannu/kanṭi- 「目」
- iṇṭi-      aidu/aidiṇṭi- 「5」
- ni-(\*-na-) pustakam/pustakāni- 「書物」（<古 pustakamu/pustakamuna-/pustakapu） cf. idi/ḍini- 「これ」
- i-        tammuḍu/tammuḍi- 「弟」 ūru/ūri- 「村」 nūlu/nūli- 「糸」
- a-        -lu/-la- （複数接辞）

語根近くの接辞が語根と融合して語幹を形成したり、選択が語彙的に条件付けられた異形態をとるのは、複数接辞の場合も同様である。以下の例では複数主格接辞をあげる。被覆語幹では、末尾の母音 u が規則的に a に交替する。

- lu (<\*-lu) kappu/kappalu 「蛙」 pustakamu/pustakālu (<pustakamulu) 「書物」 kālu/kālu 「脚」  
kōḍi/kōlu 「鶏」
- llu (<-ṇḍllu/-ṇḍru) kallu/kallu (<kandllu) 「石」 kannu/kallu (<kandllu) 「目」  
illālu/illāllu (<illāṇḍru) 「主婦」
- llu      rātri/rātrillu 「夕方」
- ulu      pani/panulu 「仕事」 maniḍi/manuḍulu 「ひと」
- tulu      nuyyi/nūtulu 「井戸」

数詞や代名詞、および、3人称指示代名詞と同様に活用する、形容詞などから派生する名詞では、普通名詞とは異なる複数表示接辞や被覆語幹形成接辞が見られる。以下の例では、/の左が複数主格形、右が複数被覆語幹形成接辞を伴う語形である。

- guru-/guri-: mugguru 「3人」 naluguru 「4人、人々」
- mandi: padimandi 「10人」
- tāmu/tama- (/tamal-): 再帰人称代名詞 cf. 単数 -tānu/tana-
- vāru/vāri-: (代名詞活用派生名詞・男女性複数敬称) 例: musali-vāru 「老人たち」
- vi/vāṭi-: (代名詞活用派生名詞・中性複数) 例: cinna-vi 「小さいの」

これに対し、これらの語群でも、被覆語幹外側の格接辞は名詞と共通で、音韻的に条件付けられた規則的な交替形しか現れず、膠着的にみえる。

1人称と2人称の人称代名詞では、対格接辞 *-ni/-nu* を付加する場合の語幹が独自の形をもち、対格語幹とでも呼ぶべきものを構成する。さらに、主格形も、語幹と接辞の膠着と分析することが可能で、この分析によれば、普通名詞の主格人称接辞と共通の接辞が人称代名詞の主格であるとみなし、これらの人称代名詞の主格語幹は被覆語幹の一種、ということになる。ただし、2人称複数代名詞 *mīru* の主格接辞と分析できる *-ru* は、普通名詞に対応する主格人称接辞が無い。

主格／被覆語幹／対格語幹	普通名詞人称主格
<i>nēnu/nā-/nan-</i> 1人称単数	<i>āḍadān-ni</i> 「女の私」
<i>nuvvu/nī-/nin-</i> 2人称単数	<i>āḍadāni-vi</i> 「女のおまえ」
<i>mēmu/mā-/mammal-</i> 1人称複数排外	<i>āḍavāḷḷa-mu</i> 「私たち女」(排外・包括)
<i>manamu/mana-/manal-</i> 1人称複数包括	<i>padimandi-mi</i> 「私たち10人」(排外・包括)
<i>mīru/mī-/mimmal-</i> 2人称複数	

cf. *āḍadi* 「女」(3人称) 複数: *āḍavāḷḷu* 「女たち」(2人称複数・3人称)

テルグ語の名詞類の形態論上の特徴は、以下のようにまとめることができる。\*は、融合する接辞付加、#は膠着的な接辞付加を表す。

語幹	[語根 (* (性・) 数接辞) (*各語幹形成接辞)]
2人称複数・3人称主格	独立語幹単独
1人称・2人称単数主格	被覆語幹または主格語幹#主格人称接辞
後置格	被覆語幹単独 (名詞または後置詞)
与格・対格	被覆語幹または対格語幹#格接辞
(主格語幹と対格語幹は人称代名詞のみ。)	

以上のような、形と意味の1対1対応を崩すような形態的特徴が、実はすべてドラヴィダ祖語まで遡りうるらしいことをドラヴィダ比較言語学は明らかにしている。

「被覆語幹」は、上記のようなテルグ語独自の特徴を考慮して本稿で用いた用語であるが、主格と斜格での語幹の交替はほぼすべてのドラヴィダ語に観察される。Zvelebil (1977: 18) が指摘するように、名詞の格変化は、斜格語幹形成接辞 (empty morph) と格接辞とによって二重に表示されるのである。

斜格語幹の形成に与る斜格接辞は、テルグ語同様に、複数の異形態を持つことが普通である。Zvelebil (1977: 23) は、ドラヴィダ祖語形として、\*t- と \*Vn- (V は何らかの母音) を仮構している。Krishnamurti (2001: 254) は、これを批判して、\*tt, \*n, \*a, \*i の4つを立て、こ

これらの接辞の二重付加の組み合わせによって Zvelebil の 2 形を説明しようとする。斜格接辞の二重付加は、タミル文語やマラヤーラム語においても観察される現象であるが、このことは、斜格接辞の機能が、日本語「子どもたち」における「ども」のように事実上「空」になっていることを示している。各語の選択する斜格接辞異形態の分布については現代ドラヴィダ語全体に及ぶような明白な対応関係は見出されない。従って、斜格接辞の選択そのものは祖語段階まで遡れないのであるが、この段階で形と意味の対一対対応、すなわち、狭義の膠着モデルが崩れていたであろう可能性は強い。

祖語段階に仮構される複数接辞は、普通名詞の \*k(V) と \*-V<sub>l</sub>、指示代名詞（あるいは、代名詞型活用における性数接辞の男女性複数）の \*- (V) r、人称・再帰代名詞の \*-m である。このうち、普通名詞では \*k(V)、\*-V<sub>l</sub> の順に 2 つの接辞が重ねられたとみられる形がもっとも分布が広いが、一部の語派では \*-V<sub>l</sub> が見られない。テルグ語の \*-tul は中部ドラヴィダ語派にのみ見られる \*-til と形が似ているが、この接辞をとる語は対応しない。北部語派のブラフイー語では、複数接辞が主格/斜格で k/t- という異形態をとる。このことから、\*t も祖語段階で複数形態素として存在していたという可能性がある。\*- (V) r や \*-m にさらに普通名詞複数接辞が重ねられる現象も、南部ドラヴィダ語派を中心に観察される。

これに対して、膠着的に付加される外側の格接辞や後置詞の中で、確実にドラヴィダ祖語の接辞として再構できるのは、ほとんどの言語に分布する与格接辞 \*- (k)ku だけである。対格接辞は、n(V) または (V)n をもつ言語と、母音だけの言語がこみいった分布をなしており、同一の祖形に遡る可能性があるが、その生成過程は明らかではない。このほかの格接辞や後置詞については、各言語または語派独自の革新として、名詞や動詞から転用されたことが確認されるものも多く、ドラヴィダ祖語にまで遡れるものはないと考えられる。

テルグ語で、普通名詞と代名詞に主格人称接辞が付加されることはすでに見たが、名詞に対して指示物の数・人称に応じた接辞を付加することは、Caldwell (1913<sup>3</sup>:477ff) が *appellative verbs or conjugated nouns*、Bloch (1946:29ff) が *noms pronominalisés* として詳述したように、ドラヴィダ祖語にまで遡る形態的特徴と考えられ、Caldwell のウゴル語派との比較から、最近では McAlpin (1974, 1981) のエラム語（所有人称接辞）との比較に至るまで、ドラヴィダ語の系統仮説でも、しばしば重要な役割を果たしてきた。しかし、その形態的特徴は、以下に挙げるように、ドラヴィダ語内部でも言語ごとに異なりがあり、祖語としてどのパターンを仮定すべきかについては、まだ今後の記述研究が待たれる部分も多い。

#### <数・人称接辞>

- ・主格形に付加される（例：古タミル語）か、斜格語幹に付加される（テルグ）か。
- ・格変化する（例：古タミル語）か、主格のみ（テルグ、マールトー、クヴィ、コンダ）か。
- ・形容詞などからの代名詞活用型名詞派生の接辞の一つとして 3 人称性・数接辞と交替する（例：古タミル語、マールトー、クヴィ、コンダ）か、交替せず人称について無標の性・数接辞に重ねて付加される（テルグ）か。
- ・普通名詞のみか、人称代名詞にも付加される（テルグ）か。

(Andronov 1970, Israel 1979, Krishnamurti 1969, Steever 1998)

語根から遠い外側の活用語尾が膠着的で異形態が少ないのに対し、語幹交替は語彙的に条件付けられている、という形態的特徴は、動詞にも共通している。再びテルグ語の例をあげる。ドラヴィダ語の伝統文法ではしばしば、2人称単数命令形を語根とし、付加されていく接辞を記述する、という形式がとられるが、この方法では、語幹に近い部分の接辞にしばしば異形態を認めることになる。そこで、**Krishnamurti (1961)** は、古テルグ語と現代テルグ語について、異形態が音韻的に条件付けられる膠着的な接辞をまず抽出し、残りを交替語幹と分析した。この方法に準じて、現代テルグ語のすべての動詞にわたって同じ交替語幹に接続する接辞をグループ化して、これらのグループに応じた交替語幹の分布を、「投げる」「来る」「聞く」の3つの動詞を例に挙げて示す。接辞の( )内は、母音連続や不可能な子音連続を避けるために脱落する音、< >内は挿入される音である。[ ]はいずれかが選択される音で、これらは音韻的に条件付けられた異形態と見ることができる。さらに接辞が後続する場合は、融合する場合(\*)と膠着的な場合(#)を区別した。未然・已然といった語幹の名称は、語幹の区別のために本稿で便宜的に採用したものである。語幹の交替は、基本的に接辞頭音によって条件付けられていることがわかる。ただし、語幹の音形の交替そのものは、音韻的には説明できないものが多い。

未然1 語幹 [=Krishnamurti (1961) の分類 C]

否定定動詞	(a) *{人称}	veyyanu, rānu, vinanu
不定形	(a) (n)	veyya (n), rā (n), vina (n)
否定連用分詞	(a) ka	veyyaka, rāka, vinaka
否定連体分詞	(a) ni	veyyani, rāni, vinani
動名詞	<v>aḍam	veyyaḍam, rāvaḍam, vinaḍam
命令形 2 人称複数	(a) ṇḍi	veyyaṇḍi, rāṇḍi, vinaṇḍi
義務形	<v>āI # {終止   連用   連体}	veyyāli, rāvāli, vināli

未然2 語幹 [=C]

命令形 2 人称単数	(u)	vey, rā, vinu
------------	-----	---------------

已然1 語幹 [=B]

過去定動詞	[i/n]*{人称}	vēsiānu, vacciānu, vinnānu
完了連用分詞	i	vēsi, vacci, vini
完了連体分詞	(i) na	vēsina, vaccina, vinna
譲歩接続分詞	(i) nā	vēsina, vaccinā, vinnā
未完了連体分詞	ē	vēsē, vaccē, vinē

已然2 語幹 [=A]

非過去定動詞	<u>[t/t]*{人称}	vēstānu, vastānu, viṇṭānu
未完了定動詞	<u>[t/t]un (n) * {人称}	vēstunnānu, vastunnānu, viṇṭunnānu
条件接続分詞	<i>[t/t]ē	vēstē, vastē, viṇṭē



未完了連用分詞	<u>[t̪]ū	vēstū, vastū, viṇ̪t̪ū
未然3語幹 [=A]		
命令形1人称複数	<u>dām	vēddām, vaddām, vindām

人称接辞が付加される定動詞の語例は、1人称単数形である。否定定動詞の接辞-*nu* とその他の時制形定動詞の接辞-*ānu* のように、人称接辞は時制接辞との融合が観察され、形と意味の1対1対応が崩れているが、動詞によって異なるということはない。その他の接辞の中にも、否定定動詞・否定連用分詞・否定連体分詞の接辞に共通に分布する否定の<sup>\*</sup>-*a*のように、さらに分析できるものもあるが、残りの部分はやはり否定接辞とのみ結合する異形態ということになる。

動詞の活用クラスは、基本的に交替語幹の分布によって決まる。Krishnamurti (1961) は動詞を5つの活用クラスと不規則活用 (VI) に分類した。この分類に従って、語形例の動詞を含む動詞の語幹交替 (未然1・2, 已然1・2, 未然3) を以下にあげる。

「沸く」(I)	kāg- (交替無し)
「投げる」(IIb)	veyy-/vey/vēs-/vēs-/vēd-
「歩く」(IIa)	naḍav-/naḍu/naḍic-/naḍ[u/i]s/naḍud-
使役・派生(III)	-inc-/inc-/inc-/is-/id-
「置く」(IV)	pett-/pett-/pett-/ped-/ped-
「聞く」(V)	vin-/vin-/vin-/viṇ̪-/vin-
再帰動詞(V/VI)	-kō-/kō-/kun-/kuṇ̪-/kun-
「与える」(VI)	ivv-/īcc-/is-/id-
「来る」(VI)	rā-/rā/vacc-/vas-/vad-
「見る」(VI)	cūḍ-/cūḍ-/cūs-/cūs-/cūd-

古テルグ語でも基本的に同様の語幹交替と活用タイプが見られる。現代テルグ語独自の活用タイプは、子音接辞の前で語幹二重子音が弱まるIV類だけである。語幹交替も、III類の動詞で、未然語幹/已然語幹の-p/cの区別が失われたこと、II/III/VI類で、子音で始まる接辞の前で語幹末子音が-s/dとなり子音連続が生じたことを除けば大きな変化はない。否定以外のすべての定動詞形語尾をはじめ、接辞の半数近くが入れ替わっているのと比べて、語幹部は相対的に安定しているといつてよい。

動詞の場合もやはり、同様の語幹交替と、交替語幹への膠着的な接辞付加が、ほとんどのドラヴィダ語で観察される。たとえば、19世紀のヨーロッパ人のタミル語文法では語幹を不変化とし、時制接辞に異形態を認めて、どの時制接辞を取るかに応じた活用タイプを設定したが、語幹+時制接辞を時制語幹と見なせば語幹交替に応じた分類となり、ドラヴィダ比較言語学的観点からは都合がよい。Emeneau (1967) は南部語派の動詞組織の変化を仮構するにあたり

「過去語幹」を設定してその対応を比較した。現代テルグ語での語幹交替の例からも、語幹の交替が本来は時制または法と関係する接辞が語幹に付加されたものであった可能性がうかがえる。

Krishnamurti (2001 : 287) は、南部語派に見られる時制接辞の異形態をドラヴィダ祖語に遡るものとし、以下のような祖語形を仮定する。

非過去 \*p, \*mp, \*k, \*nk (以上自動詞) \*pp, \*mpp, \*kk, \*nkk (以上他動詞)  
 過去 \*t, \*nt (以上自動詞) \*tt, \*ntt (以上他動詞)

これらが時制の意味を失い語幹派生接辞となった（つまり、別の時制接辞が重ねて付加されるようになった）ことが、ドラヴィダ系諸言語の自他交替においてしばしば見られる-NB/-PP や-B/- (N)P といった派生接辞の組合せを生み出した、とする。

この説に従えば、テルグ語ではⅡ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ類が時制接辞の取り込みを経た痕跡を、未然 1・2 と已然 1 (Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ類) または已然 2 (Ⅴ類) の語幹に残す語幹交替ということになる。実際、これらの活用タイプは、系統的に必ずしもテルグ語と近い関係のない他のドラヴィダ語との間にもしばしば対応が見られる。

一方、これらの語幹に接続する接辞の中でドラヴィダ祖語まで遡ることがほぼ確実なのは、否定形各接辞に分布する\*-a だけである。ドラヴィダ語は、否定活用形をもつことで知られるが、この否定活用は（テルグ語の状態相・進行相の述語と同様）時制の区別を表示しない言語が多い。時制の区別のある否定活用形がある言語でも、時制接辞に否定助動詞が後続したものか、否定接辞の後ろに時制表示助動詞が後続した構造が縮約したと解釈できる場合が多く、定動詞以外にまで時制の区別がある言語は少ない。例外は、北部語派のブラフイー語 (Bray 1909) で、この言語では非過去-p/過去-t の時制接辞に後続して接辞-a が現われる。時制を区別しないテルグ語の否定接辞は、非過去接辞が融合したと考えられる未然語幹に接続するが、トゥル語 (Kekunnaya 1994) や南部語派のように、未来語幹と未然語幹が区別されて否定接辞は時制接辞を伴わない未然語幹に接続する言語もある。否定接辞が祖語の段階で、南部語派のように時制接辞と相補的な関係にあったのか、それともブラフイー語のように本来時制接辞に後続していたものが未完了の場合だけ残ったのか、は未解決である。

テルグ語の時制接辞のうち、他のドラヴィダ語にも見出されるのが、已然 1 語幹に接続する過去・譲歩分詞・完了各分詞接辞に共通の\*-i である。テルグ語ではこの接辞が膠着的な過去接辞としてすべての動詞に共通に付加されるようになったと見られるが、南部語派では過去語幹形成接辞の異形態として\*-d, \*-nd, \*-t と相補分布を為し、中部語派では、完了連用分詞の接辞として、過去定動詞の\*-t と機能分化している。Krishnamurti (2001) の仮説では、この接辞のドラヴィダ祖語段階での位置付けが問題となろう。

否定接辞\*-a と過去時制接辞\*-i は、いずれも語幹に直接付加され、ドラヴィダ語の中には語幹形成接辞の異形態として分布するものもある接辞であるが、これらを介して付加される他の接辞は、人称接辞のように、動詞構造以外に起源をもつと考えられるものを除けば、ドラヴィダ祖語段階にまで遡れそうな分布をもつものはない。これは、古テルグ語から現代テルグ語に

至る 1000 年足らずの間に接辞の半分近くが置き換わってしまったことからもうかがえるように、これらの接辞が語幹部と比べて変化が早いことを物語っている。

以上、テルグ語の名詞と動詞の形態が、いずれも交替語幹と膠着接辞に分析でき、このような構造がおそらくドラヴィダ祖語の段階にまで遡れること、膠着接辞と比べて交替語幹を構成する不規則な接辞のほうがドラヴィダ語においてよく保たれていることを概観した。「交替語幹と膠着接辞」に似た構造は、実は日本語の名詞と動詞の形態においても観察される現象である。日本語の名詞形態は、膠着的というよりはむしろ、機能語を含む語の連鎖とでもいうべきであり、語幹と接辞という概念は馴染まないが、それでも「雨傘／雨」などの語複合や派生に見られる被覆形と露出形のように、接辞付加による交替現象は存在する。また、四段動詞と変格活用における母音付加による未然・連用・連体の活用形形成は、活用タイプを特徴付けるような交替であり、上代語から現代語に至るまで、接続する助詞・助動詞の多くが交替したにもかかわらずよく維持されている、という点がテルグ語の構造を連想させる。いずれの交替も、純粋に形態論上の理由以外には共時的な必然性がない、ということが共通点であろう。

このような類型的特徴は非常に変化しにくいものでありかつ偶然には生じにくいものである、ということが証明できれば、日本語とドラヴィダ語の系統関係を真剣に考慮する必要も出てこようが、本稿ではまず、「交替語幹と膠着接辞」という構造がどのように発生しうるか、という方向で検討してみたい。日本語の動詞についてはすでに、松本克己(1995)が、本源的に日本語に存在したのは四段活用・変格活用の動詞の未然・連用・連体形だけであろう、という興味深い論考を展開している。この仮説に従えば、3つの活用形を形成する母音は、本源的な膠着接辞だと考えることができよう。しかし、ドラヴィダ語全体にわたって異形態が複雑な分布を見せるドラヴィダ語の語幹形成接辞からは、そのようにシンプルな結論を導くことは困難である。

実は、ドラヴィダ語的な構造が発生した過程が、歴史的に確かめられるケースが存在する。ドラヴィダ語と長らく接触してきたインド・アーリヤ語である。古代インド・アーリヤ語は、もちろん典型的な「屈折語」であり、語幹交替と活用タイプに応じたさまざまな接辞群をもっていたはずである。これらは、語末音節や語中単子音の脱落、子音結合の単純化といった現代インド・アーリヤ語に至る音韻変化を経て、多くが失われた。その結果、名詞と形容詞の曲用においては、これらの格接辞が担っていた区別が後置詞の付加によって補われることになったが、しかし、本来の格変化が完全に失われたわけではない。主格と斜格、場合によっては具格の区別がヒンディー語やマラーティー語など多くの言語において維持されたし、また、数の区別は後置詞によっては代用されなかった。この結果、数は語幹のみ、格関係は語幹と後置詞とで二重に表示するという、ドラヴィダ語とパラレルな名詞構造をもつ言語が生まれた。

動詞の活用では、定動詞形の多くが失われ、代わって分詞形に導かれるさまざまな迂言構文や、定動詞形と補助動詞の連結動詞構文、さらに、一部の言語では、これらの構文の縮約による新たな活用が発生した。補助動詞は、動詞によらず一律に付加されるため、膠着的な語形を生み出すが、語幹部は完了分詞・未完了分詞・定動詞に由来するものが残ることになり、結果的に、語幹交替と膠着接辞から成る活用形が生じた。

Kasaragod Karhada 語 (インド・アーリヤ系 Kodama 2001 参照) 動詞活用例

無標語幹

命令形 2 人称単数 khā,vōcə,vāci 「食べる、行く、読む」

定動詞由来語幹

推量形 3 人称単複 khayidə,voccədə,vācidə

否定形現在単数 khayina,voccəna,vācina

否定形過去複数 khayinenti,voccənti,vācinenti

未完了分詞由来語幹

未完了連用分詞 khantana,vettana,vācitana

未来形男性単数 khanto,vetto,vācito

未完了形 1 人称 khantēlā,vettēlā,vācitēlā

? 現在形 3 人称単数 khāra,vēra,vācira

完了分詞由来語幹

過去形女性単数 khalli,gelli,vācilli

条件分詞 khalleri,gelleri,vācilleri

絶対分詞由来語幹

動名詞 khavupə,voccəpə,vācəpə

不定詞 1 khayākə,voccyākə,vācyākə

完了連用分詞 khavunu,voccunu,vācunu

つまり、ドラヴィダ語型の形態は、印欧語タイプの屈折的な構造からも生じうるのである。この場合の「膠着」は、屈折接辞が接辞としての機能を失って語幹に取り込まれる過程と同時進行である。接辞は接辞としての機能を失うと、単独で脱落することもできなくなるわけである。

ドラヴィダ語の名詞でも動詞でも、接辞の二重付加とみられる現象がしばしば見出される。このことは、ドラヴィダ祖語以前の段階においても、インド・アーリヤ語のような、本来もっと複雑であった接辞体系の単純化が起こった、という可能性があることを示唆しているようでもある。インド・アーリヤ語の場合は、このような過程が歴史的に確かめられるし、また、同系統の言語との間の語形の対応の比較言語学的な分析によって語幹の祖形を再構することも、ある程度まで可能であった。ドラヴィダ語の場合も同様に、もしドラヴィダ語と何らかの他の言語との(二元的な)系統仮説が問題になるとすれば、まずこの仮説がドラヴィダ語の語幹交替をどのように説明するか、がこの仮説の妥当性を評価するもっとも重要なポイントとなるであろう。

## 2. 結論

ドラヴィダ語の膠着的な接尾辞のうち、もっともよく維持されているのは、原則として語幹に近い部分にあって、不規則な、つまり語彙的にのみ条件付けられた異形態を為すような接尾辞であり、しばしばこの部分は語幹と融合し、語幹の交替形を構成している。一方、語幹に直接接しない外側の接尾辞はほぼ規則的に付加されるが、ドラヴィダ系言語全体に分布するものは少ない。このことは、ドラヴィダ語と他の言語の系統仮説において、これらの接尾辞の対応の意味付けが必ずしも等価ではないことを示唆する。つまり、接尾辞同士の対応が疑われる場合、偶然ではない真の対応である確率は、内側の接尾辞同士が対応しているときの方が、そうでないときよりも高い。他方、外側の接尾辞の多くが、しばしば語複合や連語構造から内的に再構できるということは、外側の接尾辞はむしろ、系統関係の仮定される他の言語においては接尾辞ではなく語彙的な形態素として保持されている可能性も高い、ということである。

ドラヴィダ語のほとんどが、名詞・動詞の両形態で、語幹形成に与かるこのような不規則な接尾辞付加を守っている、ということはどう解釈すべきであろうか。時代を遡ればこれらの不規則な接尾辞も形と意味が一对一に対応していた段階に行き着く、という解釈はたいへんもつともである。しかし、問題は、その段階がいつであったか、という点である。分化を開始した段階ですでに接尾辞と意味の対応が崩れ、現在に近い状態が出現していた、というほうが自然ではないだろうか。複数の異形態の分布が、ドラヴィダ語内の上位グループ間で必ずしも対応しないのは、本来不規則であったのを平準化するような変化がばらばらに生じたからである、と説明できるからである。しかし、このような平準化は、どのグループにおいても不徹底であったと考えねばならない。このことは、語幹周辺で形と意味の対応が崩れた状態がそれなりに安定している、ということをも物語っているようである。

上記のような解釈は、日本語の系統解明にとってどのような意味をもっているであろうか。日本語の場合、語幹周辺の異形態としては、名詞の場合はいわゆる被覆／露出両形、動詞の場合は、四段活用・変格活用の動詞で見られる未然・連用・終止といった機能分化が必ずしも明確ではない活用形の交替が挙げられる。これらは、その外側に現われる助詞や助動詞と比べて古く、二元比較によって系統仮説を立てる場合には、文法の対応の論証として、これらとの対応関係の説明をまず優先すべきである、というのが小論の主張である。この点は、さして新しくはない。

しかしながら、これらの語幹周辺の接尾辞にしても、ドラヴィダ語に見られるような語幹と接尾辞の融合と比べると、形と意味の対応はるかによく守られているように見受けられる。また、ドラヴィダ語と比べて特徴的なのは、膠着する形態の多くが活用する（助動詞である）、つまり、語としての特徴を保つ、という点である。このことは、日本語における膠着的な接尾辞付加の起源が比較的新しいことを意味してはいないだろうか。とすれば、特に、多元比較の手法を用いた言語分類学的な日本語系統研究において、膠着的な語形成を行なわない言語を視野に入れた研究が何らかの成果を挙げうる可能性を示唆しているようにも思われる。

「孤立語」「膠着語」「屈折語」という古典的な言語（形態）の類型は、現代の言語類型論においてはほぼ放棄されているといってよい。しかし、

1 (孤立語の) 語の独立性が失われ、膠着的な接辞となる。

2 膠着的な接辞が語幹あるいは他の接辞と融合し、接辞と機能の1対1の対応が崩れた(屈折的な)形態が生ずる。

というモデルの妥当性は、言語史研究ではいまだに無条件に前提とされることが多いように思われる。これは、一見、形と機能の対応が崩れて不合理に見えるインド・ヨーロッパ語の形態が、祖語の段階ではもっと整合性のあるものであった可能性があることを示した、という比較言語学成立当初から受け継がれたバイアスであると言ってもいいかもしれない。

しかし、Steever (1988, 1993) に代表される、近年のドラヴィダ比較言語学研究は、ドラヴィダ語の系統分化の過程において新たに発生した膠着的な形態の起源が、単に語が自立性を失って接辞となる、というのではなく、連語構造の融合と縮約を経て、語幹と接辞の分節が再解釈された、という事例が多いことを明らかにしている。語幹部での形と機能の1対1対応が崩れているドラヴィダ語タイプの膠着形態は、膠着接辞を入れ替えながら、その類型の特徴を維持できるわけである。したがって、その起源も、必ずしも孤立語を想定する必要がないことになる。再構すべき祖語形として、形と意味の1対1対応が崩れた状態を想定しなければならない、ということは、ドラヴィダ比較言語学の課題をより複雑にする。しかし、その複雑さは、現実の人間の言語に許容される範囲であって、決して例外的なものではない。

## 参考文献

- Andronov, Michail S. (1970) *Dravidian languages*. Moscow: Nauka Publishing House.
- (1996) *A grammar of the Malayalam language in historical treatment*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Bray, Denis de S. (1909) *The Brahui language: An old Dravidian language spoken in parts of Baluchistan and Sind*. Reprint. Delhi: Gian Publishing House.
- Bloch, Jules (1946) *Structure grammaticale des langues dravidiennes*. Paris: Adrien-Maisonneuve.
- Caldwell, Robert (1856 org. 1913<sup>3</sup>) *A comparative grammar of the Dravidian or South-Indian family of languages*. Reprint. Delhi: Asian Educational Service.
- Emeneau, M. B. (1955) *Kolami, a Dravidian language*. Berkley: University of California Press.
- (1967) The South Dravidian languages. *JAOS* 87: 365-413.
- (1975) Studies in Dravidian verb stem formation. *JAOS* 95: 1-24.
- (1994) Brahui n/r verbs. In *Dravidian studies: Selected papers*. Delhi: Motilal Banarsidas (Originally published in *Brahui and Dravidian comparative grammar*. University of California Publications in Linguistics, 27. 1962)
- Israel, M. (1979) *A grammar of the Kuvi language*. Trivandrum: Dravidian Linguistics Association
- Kekunnaya, Padmanabha (1994) *A comparative study of Tulu dialects*. Udupi: Rashtrakavi Govind Pai Research Institute.

- 児玉望 (2002) 「大野晋『タミル語と日本語』に対するコメント」『言語研究』121: 122-130.
- Kodama, Nozomi (2001) Convergence patterns in Tuluva: A new scope for comparative studies. In: Rajendra Singh (ed.) *The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics-2001*, 185-203. Delhi: Sage.
- Krishnamurti, Bhadriraju (1961) *Telugu verbal bases: A comparative and descriptive study*. Berkley: University of California Press.
- (1969) *Konda or Kubi, a Dravidian language*. Hyderabad: Tribal Cultural Research and Training Institute.
- (2001) *Comparative Dravidian linguistics : Current perspectives*. Oxford: Oxford University Press.
- Lahovary, Nicholas (1963) *Dravidian origins and the West: Newly discovered ties with the ancient culture and languages, including Basque of the Pre-Indo-European Mediterranean world*. Bombay: Orient Longman.
- McAlpin, David W. (1974) Toward proto-Elamo-Dravidian languages. *Language* 50: 89-101.
- (1981) *Proto-Elamo-Dravidian: The evidence and its implications*. Philadelphia: American Philosophical Society.
- 松本克己 (1995) 『古代日本語母音論—上代特殊仮名遣の再解釈』 東京：ひつじ書房
- Menges, K. H. (1964) Altaisch und Dravidisch, *Orbis* 13: 66-103.
- (1977) Dravidian and Altaic, *Anthropos* 72: 129-79.
- 大野晋 (1981) 『日本語とタミル語』 東京：新潮社
- Rajendra Singh (2001) Morphological diversity and morphological borrowing in South Asia. In : Rajendra Singh (ed.) *The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics-2001*, 349-368. Delhi: Sage.
- Steever, Sanford B. (1988) *The serial verb formation in the Dravidian languages*. Delhi: Motilal Banarsidas.
- (1993) *From analysis to synthesis: The development of complex verb morphology*. Delhi: Motilal Banarsidas.
- (ed.) (1998) *The Dravidian languages*. London : Routledge.
- Zvelebil, Kamil V. (1977) *A sketch of comparative Dravidian morphology*. The Hague: Mouton.
- (1990) *Dravidian linguistics: An introduction*. Pondicherry: Pondicherry Institute of Linguistics and Culture.

# Agglutination in Linguistic Drift

KODAMA Nozomi

*Kumamoto University*

**Keywords:** agglutination, Telugu, Dravidian, comparative morphology

This paper is a short outline of (historical) comparative morphology of Dravidian languages, one of the language families which classical language typology pigeonholed together with Japanese, under the vague label of “agglutinative languages”. Dravidian agglutination is far from canonical in that affixation involved in stem alternation is often conditioned lexically, as against the regular inflectional suffixes maintaining one-to-one relationships between the meaning and the form. This state of affair, somewhat reminiscent of the consonant verb conjugation or the \*-i affixation to the “bare” nominal stems in Japanese, appears to date back to Proto-Dravidian, the less regular morphology being the retained feature. The implication is twofold. The first is that, if cognates to Japanese morphology are to be sought, matches with the regular outer suffixes are less reliable since they are more prone to replacements in linguistic drift. The other is still tentative: the Japanese stem morphology with a much more uniform and agglutinative outlook in comparison with Dravidian counterparts may suggest its “isolating” origin in a nearer past.